

今年の8月は、台風6号がUターンして沖縄本島を1週間の暴風域に閉じ込め、停電、断水、食料不足などの事態に陥りました。小さい頃、台風の時期になると母はいつも「コラ台風は、とても怖かった」と話していたのを思い出しました。ちょうど私の姉が生まれた日は、第2宮古島台風（1966年台風18号）とも呼ばれ最大瞬間風速85.3m/sを記録した台風が宮古島を直撃した日でした。当時の新聞を見ると、多くの家は崩壊しており、その中で出産した母は、病院スタッフは筆舌に尽くしがたい恐怖を目の当たりにしたことでしょう。その後、いくつもの大きな台風に遭いながらも、その度、立ち上がってきた人々に力強さを感じます。

さて、9月号の表紙は、久場先生撮影の首里高台から見た慶良間沖の沈む夕日の写真です。自然界は怖さもありますが、撮影コメントのように古から変わらない美しい姿を見せて癒してくれます。

第134回沖縄県医師会医学会総会は多くの先生方が発表され、同会のシンポジウムテーマは、「新型コロナ感染症とどう向きあってきたか、その実情と今後に残された課題」と題して4人のパネリストが行政、施設支援、在宅医療、一般診療所の立場からどのように対処してきたか、また、今後の課題、対応に提言されています。コロナ禍を経験して問題点も浮き彫りになったものの多方面で成長したのではとの考察、3年ぶりの対面での学会、広い会場で食した弁当はとても美味しかったと玉井先生の喜びが溢れたレポートでした。

第225回沖縄県医師会定例代議員会では、新型コロナ感染症は増加傾向にあり未だ予断を許さない状況にあるとのこと、また、男女ともに都道府県別平均寿命の後退が顕著であり県民の健康状態の改善も重要な課題と訴えています。

第154回日本医師会定例代議員会では、厳しい医業経営の支援、難病治療中患者が高額な

薬剤使用中の場合に老健施設への入所ができない例などへの今後の診療報酬改定、指定難病医療費助成制度の在り方が議論されたとの報告がありました。偏在化による地方の薬剤師不足、医療・介護での人材不足などが性急な課題であることが再認識されます。

生涯教育コーナーは、琉球大学消化器・腫瘍外科学の金城達也先生による大腸がん診療の最近の動向（包括的概要と最先端技術）を紹介しています。治療は、低侵襲手術、癌遺伝子検査、新規抗癌剤を併用しながらテーラーメイドの治療となってより複雑化しているが専門施設と地域のクリニックが協力することが重要であると説いています。

月間行事の内容は、「結核予防週間」、「救急の日・救急医療週間」の啓蒙活動として仲本敦先生、紙尾均先生が寄稿されています。NIID国立感染症研究所のホームページには、長年の対策により結核罹患率は低下し結核予防法は廃止され感染症法として扱われるようになったが患者の発生地域の偏在や高リスク群などが次第に顕在化してきたと記載されており、沖縄県は47都道府県に4番目に高い罹患率で高齢者、基礎疾患のみでなく国外からの若年者の割合も増加してコミュニケーション支援も必要としています。紙尾先生からは、現在の救急医療の人材不足を訴え、事務員まで含めた心肺蘇生術講習会を開催、さらには医療スタッフにはより高度な講習受講を行い今後の再建計画を報告されています。

今回の台風が過ぎ、予想より短期間でライフラインは通常に戻りつつあります。この場では、取り上げていない内容もありますが、編集後記を書くにあたり何度も記事を読み返しました。私たちの毎日は、多くの尽力で支えられており全てに深く感謝して文章を閉じます。

広報委員 久志 一朗